
私の初恋

華菜恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の初恋

【Nコード】

N1774D

【作者名】

華菜恵

【あらすじ】

一目惚れの彼に小さな勇気を出した時のお話。

(前書き)

「僕の初恋」の彼女側からの視点で書いた短編小説です。
彼側の話を読んでから読むのをおすすめします。

学校からのいつもの帰り道。
特別車の多いこの横断歩道。

急ぎ足の人とぶつかる事も少なくはない。

彼は腰の曲がった小さなおばあさんの手をひきながら渡っていた。
左手にはおばあさんの重そうな荷物を持っていた。

黒くツンツンした短めの髪。

一重でキリリとした細めの目。

筋肉のなさそうな細い体。

同年代に比べて低い身長。

どちらかという和白い肌。

そう、彼はどこにでもいそうなタイプ。
見た目は特にこれといった特徴はない。

毎朝交差点で見かける彼。

名前はまだ知らない。

どうやら誰かと待ち合わせしているようだ。

きつと相手は彼女だろう。

ある朝私は遅刻しそうになり自転車で登校した。

遅刻しまいと必死でこいだ。

いつもの交差点、彼はいた。

優しい彼は来るまで彼女を待ってるのだろう。

たえ遅刻しようとも。

私は彼を追い抜いた。

時計を見ると結構な時間だ。

私は彼の元へ引き返した。

「乗りなよ。遅刻しちゃうよ。」

有無を言わず彼のカバンをカゴに積んだ。

彼を乗せて必死にこいだ。

話す言葉が見つからないまま学校に着いた。

私は汗まみれの顔を見られまいと、うつむきながらカバンを手渡し教室へ走った。

それから卒業まで彼とは話していない。

毎朝交差点で見かける彼。

今日も誰かを待っている。

きっと彼女を待っているのだろう。

私の一日は彼を見て始まる。

あと少しの勇気が持てなかった苦い思い出。

私の精一杯の初恋。

(後書き)

感想など頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1774d/>

私の初恋

2010年12月21日07時01分発行